

現代スペイン・ガリシアにおける言語使用と意識

—インタビュー調査の結果から—¹

愛知県立大学国際文化研究科国際文化専攻博士前期課程
久保美咲

1. はじめに

多言語社会における言語使用や話者の意識はどのようなものだろうか。それらは政治的状況やグローバル化といった社会情勢、また住む場所や職業など生活環境によって変わっていくものではないだろうか。このような問題意識のもと、カスティーリャ語（一般にいわゆるスペイン語）とガリシア語の2つの公用語を持つスペイン・ガリシア自治州のある家族の3人にインタビューを行った。本稿では、ガリシア語のこれまでの歩みやスペイン民主化後の言語政策を概観しつつ、インタビューから得られた3人の人生における言語使用や言語観が様々な要因で変化していく様子をとらえてみたい。

2. ガリシア語の歩みと現在

ガリシア語はイベリア半島北西部で話されていたラテン語から発展したもので、現在のガリシア自治州(図1、図2を参照)を中心にその周辺でも話されている言語である。現在のポルトガル語ともとは同じ言語であったが、1143年のポルトガル王国の独立によって別の言語として歩んでいくこととなった。そのため、言語的特徴はポルトガル語に非常に近く、また、カスティーリャ語ともかなり近い。ガリシア・アカデミー(Real Academia Galega)のホームページによると、今日、2百万人以上によって日常的に使われている。

2.1. 内戦期からフランコ独裁下(1936-1975)にかけての言語状況

カスティーリャ語が大きな影響力を持つ一方でガリシア語も民衆のことばとして存在していた状況で、1936年にカスティーリャ語とガリシア語の両言語を公用語とするガリシア自治憲章が採択された(Monteagudo 2017:p. 428)。しかし、同時期にスペイン内戦が始まり、1939年からフランコ独裁が始まった。

¹ 本稿は筆者が2016年9月から2017年7月の約1年間のサンティアゴ・デ・コンポステーラ大学文献学部ガリシア語学科への留学中に履修した「ガリシア社会言語学」の期末課題の内容を大幅に加筆修正したものである。この大学は1495年創立という長い歴史を持つ総合大学であり、ガリシア内から多くの学生が集まってくるだけでなくスペインの他の地域やEU圏内、また世界中の学生が集う場である。文献学部にも多くの留学生がやってくるが、ガリシア語学科は基本的にガリシア人学生のみで外国人留学生は非常に稀有な存在であった。そのため、「ある家族の社会言語学的沿革」と題する課題に対して、他の受講生たちは自分の家族にインタビューを行っていたところを、唯一のガリシア外出身者である筆者は友人家族の協力を得て取り組んだ。



図 1 イベリア半島の中のガリシア自治州 (筆者作成)

独裁下ではカスティーリャ語のみが国家の言語として認められ、ガリシア語などその他の言語は公的な場での使用は制限され、私的な場での使用に限られた(長谷川 2002:75 頁)。1960年代には学校教育の整備やテレビなどの普及の影響で人々へのカスティーリャ語の導入につながったが、その一方でガリシア語を擁護する動きも都市部で起こった(浅香 2004:114-115 頁)。全体としては、この時期にカスティーリャ語が上位言語、ガリシア語が下位言語という構図のダイグロシアが発展したと考えられる。

2.2. スペインの民主化以降のガリシア語

1975年にフランコが亡くなり、スペインは民主制へと移行する。現行憲法である1978年に制定された憲法では、第3条において国家の公用語はカスティーリャ語と定めつつも、スペインのその他の言語、つまり地域の固有語についても自治州によって公用語になりうるとしている。それを受けて、1981年に施行されたガリシア自治州憲章(O Estatuto de Autonomía de Galicia)は、第5条においてガリシア語がガリシアの固有の言語であり、カスティーリャ語と共に公用語であると定めた。同自治州は1983年にガリシア言語正常化法(A Lei de Normalización Lingüística de Galicia)を制定し、行政や教育、メディアなど社会のあらゆる場面におけるガリシア語の回復に取り組んでいる。



図 2 ガリシア自治州 (筆者作成)

民主化以降、教育の場面におけるガリシア語使用は推進されてきた。1979年にスペイン国王から出されスペイン教育省が承認した勅令第1981号(Real Decreto 1981/1979)では、憲法第3条の内容をふまえてスペインのカスティーリャ語以外の言語の重要性を確認し、教育にガリシア語を必修科目として導入することやガリシア語教育を行う人材育成のために教員養成課程のある大学が科目を開講することなどが定められた。これは教育機関におけるガリシア語の使用に初めて言及した法律である(柿原2006:57-58頁)。その後、1983年制定の州政令135号(Decreto 135/1983)では、「大学を除く教育における科目としてのガリシア語とカスティーリャ語の授業時間数が同じになるよう」(柿原2016:211頁)定められた。1988年には州庁令1987号(Orde 1987/1988)によって「ガリシア語を他の教科の教育言語として使用することを初めて明記した」(同上)。1995年にも州政令(Decreto 247/1995)によって教育における同言語の使用拡大が目指されたが、「科目としてのガリシア語に関する規定以外は、義務的なものではなく、教育媒介言語としてのガリシア語の使用は、各学校の裁量に任されており、対応は様々」(柿原2006:59頁)だったようである。2004年に承認された正常化総合プラン(O Plan Xeral de Normalización)は教育に関して「初等教育から学習内容の少なくとも50%をガリシア語で授業すべきだと提案」(柿原2016:211頁)した。2007年に実施への法的動きがあったものの、2010年には「ガリシアの大学以外の教育における複数言語使用のための」州政令79号(Decreto 79/2010)によって「ガリシア語の存在が相対的に縮小する可能性が出てきた」(同上212頁)。この法から読み取れるように、近年はグローバル化による

英語教育の需要などからガリシア語教育の推進が減速してきている。

また、現在のガリシアの言語使用の特徴のひとつとして、地域による使用の違いが挙げられる。一般に、ビーゴ(Vigo)やア・コルーニャ(A Coruña)などの都市部ではカスティーリャ語が、農村部ではガリシア語が多く話されている。しかし、州都であるサンティアゴ・デ・コンポステーラ(Santiago de Compostela、以後サンティアゴ)は例外的にガリシア語の使用が多くみられる。

3. インタビュー調査の結果

フランコ体制から民主化を経て現在までの間に、ガリシア語を巡る社会状況は大きく変化したと考えられる。そのなかでガリシアに生きる人々はどのように言語を使用してきたのか。ガリシア自治州の西部に住むある家族の、異なる世代の 3 人の女性にインタビューを行い、それぞれの人生を振り返りつつ、特に言語に関する話をしてもらった。3 人の話には、使用していた言語の齟齬や家庭環境の認識に多少の矛盾点もあるが、本人の話の内容通りに書くこととした。なお、話に出てくる地名のほとんどは図 2 中に黒丸で示した。

図 3 は 3 人を含む家系図である。インタビューを行った 3 人は色を付けて示した Rita さん、Aia さん、Erea さんである。簡単に家族構成を紹介すると、Rita さんは Aia さんと Erea さんの母親である。2 人は父親が異なっており、Aia さんの父親の José Manuel さんは再婚していて、Aia さんには母親の違う弟 Uxío さんがいる。Erea さんの父親は Rita さんの後夫の José María さんである。Aia さんには 2 人のこどもがいる。図の下部に示した通り、Rita さんは 8 人兄弟の長女である。

なお、インタビューは Rita さんと Aia さんは 2017 年 5 月 5 日、Erea さんは同年 6 月 1 日に、ガリシア語で実施した。

3.1. Rita さんの話

Rita さんはフランコ独裁期の 1952 年にガリシア州アコルーニャ県のムーロス(Muros)で生まれ、14 歳までそこで過ごした。家庭では母や祖母はガリシア語で話していたが、村長であった父は基本的にはカスティーリャ語を話し、ガリシア語も時折話すという、2 言語が入り混じった環境で育った。まず、地元の修道院系の学校に通ったが、修道女たちはカスティーリャ出身でガリシア語は全く話さず、教材を含め教育は全てカスティーリャ語だった。しかし、こどもたちの間では 2 言語で会話が行われていた。その後、スペインの首都マドリードの学校へ進学したが、ここではもちろん全てがカスティーリャ語だった。2 年後にガリシアへ戻り、サンティアゴ・デ・コンポステーラ大学に入学した。まず教員養成課程で学んだ後、医学を修めた。長い間サンティアゴに住んだが、在学中 1 年間ポンテベドラ県のビーゴにも住んでいた。独裁末期の当時は「全てがカスティーリャ語」だったが、大学におけるガリシア語の威信を高めようとする動きやガリシア語を用いる政党も存在していた。Rita さんはガリシア語とカスティーリャ語を状況によって使い分けていた。

現在はビーゴ近郊のゴンドマル(Gondomar)に基本的には夫 José María さんと 2 人で

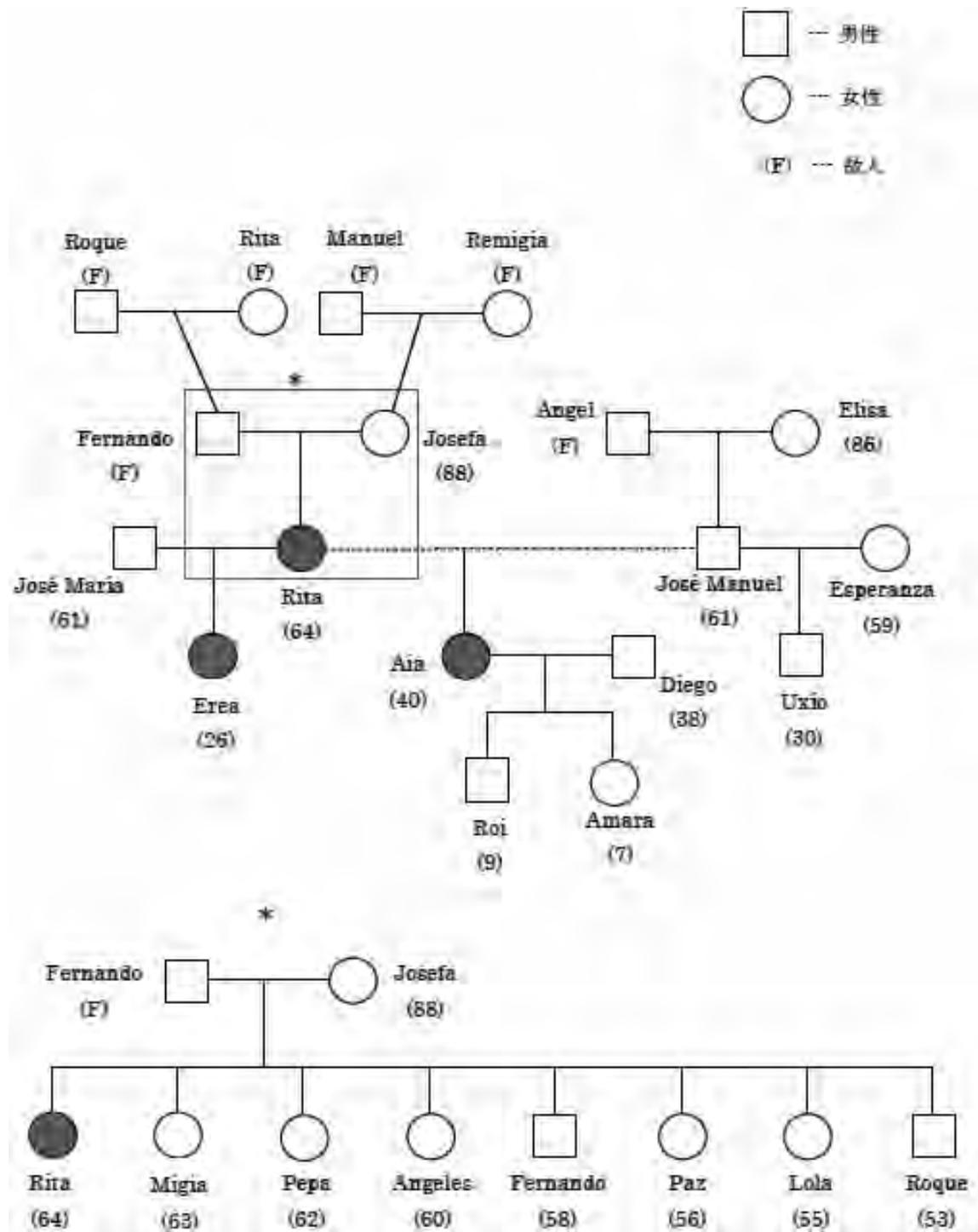


図 3 家系図 ()内はインタビュー時の年齢 (筆者作成)

暮らしており²、医師として働いている。仕事では都市部の人とも農村部の人とも関わる機会があるが、ほとんどの人が初めはカスティーリャ語で話しかけてくるという。医師との会話ということで「カスティーリャ語がより適切だと考える人が多いからではないか」と彼女は話していた。しかし、彼女がガリシア語で話しかけるとビーゴ中心部出身の人以外は言語を切り替えてガリシア語で会話をするようになるそうである。

Ritaさんは2回結婚し、2人の娘と2人の孫がいる。現在の夫も医師であり、2人の間ではほぼガリシア語で会話をしている。時々カスティーリャ語が混じることもあるが、常にガリシア語で話すようにしているという。読書などの文化活動でも常にガリシア語を使っている。娘たちや孫たちともガリシア語で話すようにしているが、2人目の娘のEreaさんについては、「幼い頃はガリシア語を日常的に話していたにもかかわらず成長するにつれカスティーリャ語を話すようになった」と複雑そうに語った。また、孫たちについても「小さい頃はガリシア語で話していたが幼稚園や小学校に入学した頃から言語を切り替え、理解はしているにもかかわらずガリシア語で返答することがなくなってしまった、とても悲しく思う」と話していた。

また、Ritaさんの母親や弟妹たちについての話も聞くことができた。Ritaさんには5人の妹と2人の弟がいるが、現在はかなり散らばって暮らしておりその居住地によって使用言語が異なっている。年齢順にみると、Migiaさんはビーゴに住んでいてカスティーリャ語を話し、Pepaさんはサンティアゴ在住でガリシア語を話す。Angelesさんは現在はビーゴ在住だがメキシコに住んでいたことがあり、カスティーリャ語を話している。Fernandoさんはガリシアの農村部に住んでいてガリシア語を話す。Pazさんは過去にアンダルシアに住んでいたことがあり、現在はガリシアの農村部に住んでいるが日常使用する言語はカスティーリャ語である。彼女は演劇をやっておりガリシア語を話そうとしているがなかなか困難であるらしい。また、末妹のLolaさんはサンティアゴ在住でサンティアゴ巡礼のオフィスで働いており両言語を話す。末弟のRoqueさんは現在ニューヨーク在住でカスティーリャ語と英語を話している。

Ritaさんの母であるJosefaさんは1928年生まれで、「最悪な時代を生きた人だ」とRitaさんは語った。フランコ独裁期、学校ではカスティーリャ語の使用は強制的なもので、ガリシア語で話そうとした教師たちは学校から追い出されたそうである。Josefaさんの母語はカスティーリャ語とガリシア語の両方であるが、幼少期には家の外で友人と話す時はガリシア語を使い、家ではカスティーリャ語を話していた。彼女の父のManuelさんは長い間海外に住み、英語を話していたが、ガリシアの農村に来た後はカスティーリャ語は話さず、ガリシア語のみを話していた。一般的に、より若い世代がカスティーリャ語で話していたとRitaさんは言う。

3.2. Aiaさんの話

Aiaさんはフランコの死の翌年1976年にサンティアゴに生まれ、そこで育った。家庭では全員がカスティーリャ語を話していた。彼女の母であるRitaさんはカスティーリャ語しか話さない家で暮らしていて、その父(Aiaさんの祖父にあたる)Fernandoさんは「フランコ支持者」でカスティーリャ語を話していたそうだ。また、Aiaさんの父であるJosé Manuelさんは常にカ

² 下の娘のEreaさんは進学のため平日はサンティアゴに住んでいるものの、週末や長期休暇はゴンドマールの実家で過ごすことが多い。このような居住パターンはガリシアの大学生では一般的なものである。

スティーリャ語を話していた。これは、José Manuel さんの母(Aia さんの祖母にあたる)Elisa さんが共和国の役人でグアダラハラ(Guadalajara)からガリシアへやってきたため、José Manuel さんの家族がほぼガリシア語を話さなかったからである。しかしながら、Aia さんは、1 度だけ祖母の Elisa さんがガリシア語を話すのを聞いたことがある。それは戦争反対デモの最中にスペイン公営放送(TVE)に戦争についての意見を聞かれた時で、Elisa さんはそれに全てガリシア語で答えていたため Aia さんはとても驚いたという。

小・中学校ではほとんどの子どもたちがカスティーリャ語を話していた。教師たちも大部分はカスティーリャ語を話していて、ガリシア語で授業を行う必要があるにもかかわらずガリシア語を話すことができない教師もいたほどだった。しかし、体験型の高校に入学し、ガリシア語で様々なアクティビティーや課題をしなければならない環境になったことで Aia さんはガリシア語を使用するようになった。そして大学進学後もガリシア語を使い続けた。

Aia さんはガリシア人の男性(Diego さん)と結婚し、現在は中学校の生物教師として働きながら、サンティアゴ近郊のブリオン(Brión)という自治体の中のオ・トレモ(O Tremo)というところに夫と 2 人の子どもと共に暮らしている。Aia さんも Diego さんもカスティーリャ語で育てられたため、たまにカスティーリャ語が出てくることがあるが、家庭では極力ガリシア語で話すようにしている。近所の人たちともガリシア語で話す。子どもたちともガリシア語で話す。Rita さんの話にもあったように、現在子どもたちはカスティーリャ語でしか返答をしないそうである。ただし、両親に頼み事をする時だけは例外らしく、お願いを聞き入れてもらいやすくなるようガリシア語を用いるということである。

また、現在マドリード(Madrid)に暮らす弟の Uxío さんやマラガ(Málaga)在住の父 José Manuel さんとはカスティーリャ語で話す。妹の Erea さんとはガリシア語で話すこともあるが、Erea さんの日常的に話す言語がカスティーリャ語であることと Aia さんの第一言語がカスティーリャ語であることから、そちらの言語へと流れることも多い。

中学校の生物教師としての仕事では、発話・書記ともに常にガリシア語が用いられる。さらに、Aia さんはフェミニスト活動団体に参加しており、そこでもガリシア語を話し、SNS でも常に同言語を用いている。そのため、彼女の常用言語は基本的にガリシア語であるといえる。

3.3. Erea さんの話

Erea さんは 1990 年にビーゴで生まれ、ゴンドマールで育った。彼女が育った村ではほぼ全員がガリシア語を話していたため、幼い頃は現在よりも日常的にガリシア語を話していた。家では両親はガリシア語を主に話し、時々カスティーリャ語も話した。故に彼女の母語はガリシア語とカスティーリャ語といえる。また、子どもの頃はよくガリシア語のテレビ番組を見ていたとのことである。

村の小学校に通っている間も主にガリシア語を話していた。しかし、ビーゴの中学校に進学するとほとんどカスティーリャ語だけを話すようになった。同級生たちは全員カスティーリャ語母語話者で、ガリシア語を話す人がほぼいなかったためである。その後、自分の村の高校に進学すると、再びガリシア語を話すようになった。その高校にはとても活動的なガリシア語教師がいて、ガリシア語で様々な文学コンクールやアクティビティーを行っていた。Erea さんもその活動に参加し、高校在学中の 2 年間はガリシア語で読み書きする機会が多かった。18

歳の時にサンティアゴ・デ・コンポステーラ大学文献学部のスペイン語学科で学び始めた。現在は課程自体は修了しているが、同大学で勉強を続けている。大学の授業はいくつかの学部共通のもの以外はほぼ全てカスティーリャ語で行われている。また、大学在学中には交換留学等で他の国や地域へ行ったこともある。そのため、この数年でガリシア語を話す習慣を失いつつある。それに加えて、現在は友人たちとガリシア語で話すこともほとんどない。ガリシア語で話す友人は2人ほどしかおらず、その人たちにはガリシア語で返答する。しかし、特に仲の良い友人に限れば、ガリシア出身であってもガリシア語で話さない人やガリシア以外の出身でカスティーリャ語で話す人であり、ガリシア語で会話する機会はほとんどない。

Ereaさんが家族の中で最もガリシア語で会話をするのは祖母の Josefaさんと父の José Maríaさんである。José Maríaさんはカスティーリャ語でも話すのが、ガリシア語の方が先に出るそうだ。母の Ritaさんとは両言語で話すのが、Ereaさんによると、Ritaさんは使用言語を無意識に変えていて、Ereaさんが大きくなってからはカスティーリャ語で話すことが多くなったという。24人のいとこたちとは基本的にカスティーリャ語で話す。アンダルシアやメキシコ、ニューヨークなどガリシア以外の出身のいとこもいるためである。姪と甥とは、RitaさんとAiaさんの話にもあったように2人がカスティーリャ語ばかり話すようになったため、基本的にカスティーリャ語で話しているが、最近では2人がガリシア語を少しでも話し始めるようにとガリシア語で話しかけるようにしている。また、姉の Aiaさんとも、特に子どもたちという時には、できるだけガリシア語で話すようにしている。Aiaさんと共にガリシアフェミニスト運動の集まりに行っているが、そこでの使用言語は全てガリシア語であるため、その場ではガリシア語だけを話すようにしている。しかし、Aiaさんと2人の時はカスティーリャ語で話すことがほとんどである。

Ereaさんは語学が好きで日本語の勉強もしており、「全ての言語は平等だ」と考えている。カスティーリャ語で話しかけられればカスティーリャ語で返すし、ガリシア語で話しかけられればガリシア語で返す、というように彼女は両言語を、会話をする相手の言語によって使い分けている。また、読書や音楽鑑賞なども両言語で行う。

4. 考察

3人の話から多言語社会における言語使用や言語態度の変容が垣間見えたが、その要因は様々であった。ここで一度まとめてみる。

まず顕著なのが独裁期の影響である。Ritaさんはフランコ独裁期に生まれガリシア語とカスティーリャ語が入り混じった環境で育ったが、学校教育など公的な場面ではカスティーリャ語しか使われていなかった。Aiaさんはフランコの死の翌年の1976年生まれだが、独裁下で育った両親の影響でカスティーリャ語環境で育つことになった。彼女の小・中学校時代の話からは周囲の子どもたちも同様であったことや教師たちの多くもガリシア語に触れる機会があまりないまま民主化後のガリシア語を取り入れた教育制度が始まってしまったらしいことが読み取れる。

また、Ereaさんの話からは生活する地域による使用言語の変化がよくわかる。都市ではカスティーリャ語、村落ではガリシア語が主に使われており、彼女はそれに合わせて言語選択を行っていた。同様のことが Ritaさんの兄弟の使用言語からもわかる。

カスティーリャ語母語話者であった Aiaさんがガリシア語を使用するようになったきっかけ

は高校進学であった。ガリシア語で様々な活動をする必要性から同言語を身につけ、その後の人生では仕事を含め日常言語として使うようになった。Erea さんの話に高校時代のとても活動的なガリシア語教師が出てきたことから、教育の場におけるガリシア語使用の推進はある程度学生の言語選択に影響を及ぼすと考えられる。また、一般的には固有の言語の存続のためには親から子への言語継承も重要だと考えられるが、ガリシア語の場合はカスティーリャ語との言語的な近さによる学習のしやすさから、カスティーリャ語が母語であれば途中で習得することもさほど難しくはないため、ガリシア語教育の重要性も大きいだろう。

医師である Rita さんの話からは、患者の多くは医師との会話という場面にはカスティーリャ語が適切であると考えていることがわかる。しかし、Rita さんの方がガリシア語で話すと、もともとガリシア語を日常言語にしている人々は言語を切り替えて会話をする。このことから、カスティーリャ語を上位、ガリシア語を下位とするダイグロシア状態が一部では残っているものの、上の立場にあたる者が積極的に下位言語とみなされている言語を用いることで一時的かもしれないがそれを打破できるということがうかがえる。

また、インタビュー全体を通してバイリンガリズムの実態が多様であることが読み取れた。インタビューをした3人やその周りの人々は全員少なくともカスティーリャ語とガリシア語のバイリンガルである。読む・書く言語については意識的に選択が可能だが、話す言語に関しては完全に意識的に選択をすることは難しい。Rita さんの例だが、本人は常にガリシア語を話しているつもりでも、周りの人の話から実際はかなりカスティーリャ語も話していることがわかった。Rita さんは話の中で、娘や孫たちがガリシア語で話すのをやめてカスティーリャ語しか話さなくなったことに対する悲しみを明らかにしていた。また、インタビューをした日に、5月17日のガリシア文学の日(O Día das Letras Galegas)に際して孫たちにガリシア語の本をプレゼントしていたことから、彼女のガリシア語に対するアイデンティティが感じられる。その気持ち故に常にガリシア語を用いていると自分では考えていたのではないだろうか。それに対して、若年層では話す言語の選択がより自覚的に、場合によっては戦略的に行われているようだ。Erea さんの場合、全ての言語は平等であり優劣はないという考えを持っており、言語選択は基本的に相手に合わせて行っている。Aia さんの2人のこどもたちは、幼稚園や小学校に通い始めた際に日常言語をガリシア語からカスティーリャ語に切り替えたが、親にお願いをする時だけは戦略的にガリシア語を用いている。

以上、現代のスペイン・ガリシアで生きる人々の言語使用や言語態度の一例をみてきた。独裁下で公的場面から締め出されたガリシア語は、民主化後ガリシア自治州内でカスティーリャ語とともに公用語となり、教育も推進された。近年のグローバル化にともなう言語状況の変化から、若い世代は言語に対してより意識的になっていると考えられる。そのなかでガリシア語とカスティーリャ語の関係がどう変わっていくのかを様々な角度から考察し、多言語共存社会の将来を見据える必要があるだろう。

参考文献

- 浅香武和「ガリシア語の社会言語学的考察」神奈川大学『神奈川大学言語研究』26号、2004年、113-131頁
- 柿原武史「スペインガリシア自治州におけるガリシア語教育政策に関する一考察」日本イスパニヤ学会『イスパニカ』50号、2006年、55-76頁
- 柿原武史「少数言語回復政策の困難—スペイン・ガリシア自治州で進む脱ガリシア語化と言語権—」南山大学紀要『アカデミア』人文・自然科学編 12号、2016年、209-220頁
- 長谷川信弥「多言語国家スペイン カタロニア自治州の場合」大阪外国語大学言語社会学会『Ex Oriente』第6巻号、2002年、73-95頁
- 坂東省次・桑原真夫・浅香武和『エリア・スタディーズ 88 スペインのガリシアを知るための50章』明石書店、2011年
- Real Academia Galega, O galego na historia (<http://academia.gal/idioma>) (2017年11月30日最終閲覧)
- Monteagudo, Henrique.(2017) *Historia social da lingua galega*. Vigo : Editorial Galaxia.